ある不登校児（小3）の変容過程
――箱庭療法的援助を試みて――

清原　浩*・柳北　裕代**・丸内　一哉***

（1988年10月14日　受理）

The Development of a School Phobic Child
――By Sand-Play Technique――

Hiroshi KIYOHARA・Hiroyo YANAKITA・Kazuya MARUUCHI

I．問　　題

1．不登校現象の原因・類型

不登校とは病気などの合理的な理由による欠席を除き，なんらかの心理的要因によって，長期にわたって学校に出席できないという客観的状態を指すものとする。従来，登校拒否とか学校恐怖症とか言われていたものとほぼ同じであるが，次に述べる原因や不登校の類型にこだわることなく不登校という事実に着目して援助を試みたいと考えているので，以下の論述では可能な限り不登校という用語を使用したい。なお，こうした用語の使用法は稲村（1988）のいう最も広くとらえた定義に分類されよう[1]。

さて，不登校の原因についていえば，一般的に4つの要因が挙げられている。たとえば，小泉（1980）によれば，次のようである[2]。まず，社会的要因として，価値観の多様化と社会的規制力の弱化，都市化現象の中での地域的連帯や共同体意識の喪失，そして核家族化と育児力の低下などが不登校現象を引き起こす間接的要因として上げられている。次に学校要因として，受験戦争の圧力，知育偏重の教育，盛り込みすぎの教育課程，画一的教育，管理主義・切り捨て主義の教育などが上げられている。さらに，家庭的要因として，子どもを社会化させていく父性原理が機能していない家庭，世話好きの過保護タイプの母親のもとで社会的にも情緒的にも未成熟な子どもを育てがちな家庭，一方しつけも教育もきちんとし失敗や落度のない教育熱心な母親のもとで母親の期待に過剰適応する子どもを育てがちな家庭。以上のような生育環境の中で必然的に形成されがちな子ども自身の性格的要因として，感受性が強い，神経質，自尊心が強い，マイペースを好む，さらには

*　鹿児島大学教育学部
**　東京都立城南養護学校教諭　　***　長崎県立諫早養護学校講師

社会性が未成熟，潔癖，完全主義，過度の自己抑制などの傾向が，何らかのきっかけで子どもを家庭に引き込ませるとしている。高木（1983）は内外の学説を批判的に検討しながら主として3つの説を抽出している[3]。一つは「分離不安説」としてまとめられるもので，その代表者の一人，L.アイゼンバーグによれば次のようである。さまざまな要因によってではあるが母親が子どもに過保護的になる。そのことを子ども側からいうと母親に対し過依存的になることであるが，子どものこうした態度が，結局母親の自由を拘束することとなり，母親の子どもに対する意識下の敵意の源になる。そうして，今度はその敵意の代償として，さらに子どもへの過保護を発達させる。子どもはこうした拒否と過保護の両方に反応し，親に対して両価的な感情を持つこととなる。こうした準備状態があるところで，転校，教師による強い叱責など直接的なキッカケによって，子どもの強固な不安が生ずると，その不安は何倍かにふくれあがり，これがまた両価的態度を持つ親の不安をつのらせ，両者は一体となって互いに不安症状を強めて行く。結果として学校に行けないことにもなる，というものである。この考え方に立つならば，「学校恐怖」ということより，分離不安が本質的な問題となる。A.M.ジョンソンを始めH.R.エステス，J.C.クーリッジ，M.タルボー，鷲見らがこの立場に立っているとされている。二つには反分離不安説とも言うべきものである。例えば，T.レーベンダールとM.シリス（1964）は「生活の全領域で母親から分離することが困難であるべきなのに，なぜ学校に行くときだけ問題になるのか」と疑問を投げかけ，自らの仮説として次のような趣旨を述べている。「学校恐怖症児」は自己を過大評価し，非現実的な自己像を持っているため，これが現実の学校状況で脅威にさらされ，不安を感じ，自己愛的に自我像を維持できるような状況に退避しなければならなくなる。これが結果として不登校となるとしている。高木，宇津木　などがこの立場とされている。三つめとして学校原因論としてまとめられる説がある。H.J.アイゼンクとS.J.ラックマン（1965）らは「学校恐怖症」の「考えられる原因は学校それ自体の中に1ダースもある」と，学校の問題を理由としている。ただ，この論者の場合，学校状況の改善が目指されるのではなく，学校への「恐怖」感を除去することが目標とされている。前述のH.J.アイゼンクをはじめA.A.ラザルス，G.R.パターソン，W.P.ガーベイ，園田ら行動療法の立場に立つ人にこの説が多い。なお最近，稲村（1988）は不登校の発生機序として，本人，家庭，社会の諸条件が輻輳しながら長期にわたって形成されてきた心理的状態を準備状態，友人関係，勉学問題，学校生活などにおけるトラブルが発症契機となって不登校が生じると，述べているが，上述の小泉の提起している4つの要因の相互関係を述べているともとらえられる[1]。筆者は社会状況，学校状況が家庭環境を媒介として子どもの性格形成に影響を及ぼし，子どもの性格が再び家庭環境に影響を及ぼしながら，「問題」状況が形成されていくと考えている。とすれば，筆者たち援助にかかわっている人たちは家族と本人への積極的な援助と共に社会と学校状況改善への提言も必要とされよう。

さて，上述のように複雑な諸要因が重なって，不登校状態を現出させているにしろ，現に不登校状態にある子どもたちをみるとき，おのずと子どもたちのあいだに若干の違いと共通性が見られ

る。結果として類型化ができるのである。こうした試みを子どもたちにレッテルをはる知的作業に過ぎないと考える人も存在すると思われるが，決してそうではなく，その後の援助のあり方に示唆を与えてくれるものであり，有用なことであると思われる。稲村（1988）の提唱する類型が平易で網羅的であるので，それを紹介したい[1]。それによると，１．急性型－諸研究者によって中核群，神経症群，学校恐怖症などと呼ばれたタイプで思春期に好発し，今日，不登校の中心をなす，２．反復型－慢性型，社会的未熟・退嬰群といわれていたタイプで，幼稚園や小学校低学年から始まる。母子分離に問題がある場合が多い，３．精神障害型－うつ病，分裂病など精神障害を持っている可能性が高いタイプ，４．怠学型－勉強が嫌いであるとか学校という集団生活が窮屈で耐えられないタイプ，５．その他－信念のある積極的拒否など，である。諸研究者によって，様々なタイプ分けがなされているが大同小異なので省略したい。

２．援助のあり方と箱庭療法

従来，よって立つ不登校の原因論に応じて，援助のあり方も分かれていた。たとえば分離不安説をとる治療者はカウンセリング過程を通して母子関係の再調整を目指し，子どもの自己像（レーベンタール）や自己概念（ロジャース）に問題があるとするならば自己像の再構築を援助の中心的課題とし，学校への恐怖感を原因とするならば恐怖感を脱感作によって消去することが課題となるといった状況であった。筆者について言えば，家族全体の問題を軸にみていく方法を取っているので（家族療法），視点がそちらに傾く傾向を持っている。しかし，東京，大阪の父母の会，あるいは自らの治療的枠組みにこだわらない実践家，研究者たちがきわめて多様で多彩な試みを統合させながら，援助を進めている。その一人が上述の稲村（1988）である。その総合的な援助体系は「青少年健康センター」構想としてまとめられている[1]が，カウンセリングを通しての援助は言うまでもなく医療的援助，電話相談，不登校児の溜まり場－若者クラブ，合宿活動，宿泊療法，入院療法，専門家や親の研修活動，青少年の健康な発達を援助するウェルネス部門など総合的である。３年，４年あるいは10年と家に閉じこもっていれば，不登校の原因のいかんを問わず，生活力，学力，社会性，気力などあらゆる面で，落ち込んでくる現実を考えるとき，こうした総合的援助が不可避であると，筆者も考える。しかし，筆者の置かれている客観的条件が，直ちにそうした取り組みを可能としていない現在，子どもに対しては以下に述べるような箱庭療法的かかわり，母親にはカウンセリングを通して家庭における人間関係の改善を目指し，その両者にわたっての援助によって少しなりとも深刻な困惑の状態にある家族に力になれたらと願って以下のような取組みを試みた。

箱庭療法的かかわりの具体的な進め方は次章の「方法」で述べるとして，ここでは，箱庭療法の基本的な考え方と治癒原理について紹介したい。なお，箱庭療法といえば必ず言及されるユングについてその評価は様々で，筆者にとっても全面的に肯定しがたい面もあるが，その問題については今後の課題として論を進めたい。

箱庭療法[4]は，1929年M.ローエンフェルトによって，子どものための心理療法の一手段として

考案された。D.カルフによってC.G.ユングの分析心理学の考えが導入され，成人にも効果のある治療法として発展させられた。それが箱庭療法となった。カルフの手ほどきを受けた河合隼雄が1965年に日本に導入，発展し1987年日本箱庭療法学会が結成されるに至った。

カルフは箱庭に表現された作品を自己の表現への過程であると考える。そして，自己を示す作品の典型としてマンダラによる聖域の表現を重視している（マンダラ的配置は3章「結果」の箱庭作品を参照のこと)。カルフはユングの言葉を引用して「古来，円および中心の点は神の象徴であり，それを受肉化した神の全体性ーつまり，中心の点と周辺の多くの点ーを図示しているのである。さらに心理学的には，この配置はマンダラを意味し，同時に自己の象徴を意味している」とマンダラを説明している。マンダラ[5]とは，サンスクリット語であり，一般には円を意味する。栂尾によると「秘教では本質の義，道場の義，壇の義，衆集の義の4つの概念になる。曼陀羅はmandaという語基とlaという後接語とから成立している。その中，曼陀とは，心髄，本質の義で羅とは凡語の後接語たるmat，vatと等しく，所有の義，成就の義で，つまり曼陀羅とは本質，心髄を有しているものという義である」と言う。ユングは，患者を分析する過程で，円と四角をテーマとするイメージが出現してくるのに気づく。「マンダラは無秩序と混乱の時に生じ，それらを相補して安定を得させる働きがある」と言い，「全体性の元型と呼ぶことができる」と言う。河合（1978）も「意識的には分裂の危機を感じ，あるいは強い不統合性を感じて解決策もなくて困っている人が，このマンダラ象徴が生じることによって心の平静を得，新たな統合性へと志向してゆく過程を見ることを経験すること，人間の心の内部にある全体性と統合性へ向かう働きの存在，自己治癒の力の存在を感ぜずにはおられないのである」と述べている。

さて，それではマンダラ的世界，自己の統合の世界にどのように到達していくのだろうか。カルフは，E．ノイマンの考えに基づいて，1．動，植物段階，2．戦いの段階，3．統合の段階と進んで行くと仮定している（表1参照)。先ず，自己表現があり，それから上記の三段階を経て，再び統合化された自己が表現されると考えている。

箱庭の持つ治療的意味合い（治癒原理）については，岡田（1982）が次の4点を掲げている[4]。筆者の見解も加味しながら，述べる。

1）治療的人間関係の持つ治癒力

箱庭療法的かかわりは終始，温かな，信頼できる人間関係のもとに進められる。カルフの言う「母子一体性」とも言うべき治療者と患者の関係が箱庭を作らせる原動力ともなるし，作品を作ることによって「母子一体性」的関係がさらに深化し，その感情を患者が体験するという相互関係になっている。こうした内的体験を通して，温かな母性性を患者が再び実感し，母親との関係を改善するのである。

2）カタルシスの持つ治癒力

砂という治療的退行（例えば，幼児にもどるなど）を容易に起こさせる素材，上述した「母子一体性」という治療者の温かい態度から，子どものなかに今まで抑圧されていたもの

が発散されるようになる。この時，無意識内に抑圧されていたものが，箱庭作品を通して，一つのイメージとして外界へ表現されてくる。このこと自体が治癒的働きである。

3）自己表現の治癒力

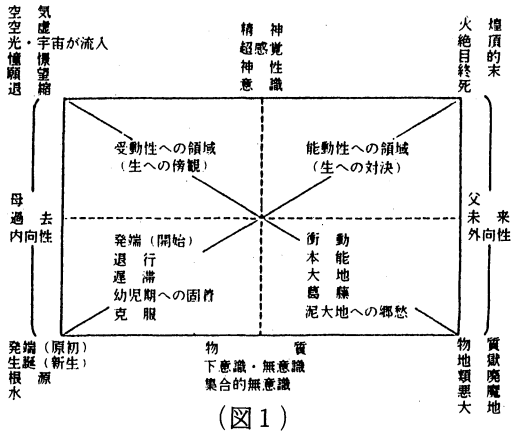
箱庭を制作することは，無意識にある創造性を発揮していくことであり，それは自己表現である。自分を十分に表現できることは，心理的な障害を克服することである。なぜなら，心理的障害があることは，自分を表現できない，発揮できないことと深い関係があるからである。箱庭では一度だけ自己表現するのではなくて，連続して制作していくその過程が大切な治療への歩みである。

4）自己治癒力の発揮という治癒力

成長力とか自己実現への力ともよばれているものである。自己を表現できることは，人間が誰しも持っている自己治癒力の働きを促すことである。ここではカルフの言う「自由で保護された空間」の中で制作していくにつれて自己治癒力が発揮されるものと仮定されている。

最後に箱庭表現の理解の手がかりについて，一般的に言われていることについて紹介したい。あくまでも手がかりであって，河合（1982）も「作品をクライエントの在り方すべてとの関連，作品の前後の流れのなかでの関連，などによって把握するようにしなければならない」と述べている[8]が，全く同感である。以上のことを前提としつつ，より深く理解する着眼点について述べよう。河合（1969）は，理解の手がかりとして，1．全体的な布置，2．主題，3．象徴的理解，4．系列的理解の４つを上げている。布置とは出合いのありようも含めた箱庭作品の全体な印象，主題とは作品のテーマ，象徴的理解とはその作品の象徴的な意味をとらえること，系列的理解とは１回きりの作品でなく，何回か連続して作られた作品をシリーズとして検討し，作品の意味を把握することである。筆者たちはこれらの視点のうち，統合性，空間配置，主題を軸に理解しようと試みている。なお，空間配置については，グリュンワルトの空間象徴理論と秋山達子の空間図式の見方に依拠して，箱の上下左右の意味づけがなされている（図１を参照）。

グリュンワルトの空間図式



（図１）

Ⅱ．方　　法

1．対象児について

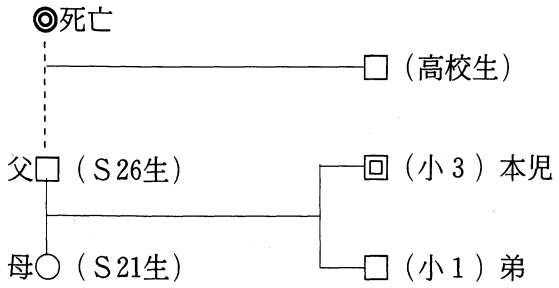
(1)対象児名および生年月日

T・K児（男児），昭和53年7月23日生れ

(2)来談時日

昭和62年4月24日，8歳9ケ月

(3)家族構成



○父36歳（会社員），母41歳（専業主婦），本児9歳（小学校3年），弟（小学校1年），義兄（高校生）

○母親は当時小学2年男子を育てている男性（今は別れている夫）と初婚。「子づれのやもめ暮らしに同情して」結婚。

○現在は離婚している（昭和62年2月）。原因は夫のサラ金からの借り入れ金による経済的破綻による。

○夫はお人好しで，気弱なところがあり，甘えん坊で，借金取の取立てに困って，泣くこともしばしばであった。

○義理の長子も，性格はいいが，非行傾向の友人と付合い，盗みの疑いを受けたこともある。対人関係，礼儀など身につけていない。

○母親自身については，事業を営む実父の手伝いをしたりしてきて，男まさりのところがあり，また実母と似て「カッとなりやすい」性格と述べている。孫である本児を溺愛していた実父も3年前に死亡している。

(4)本児の生育暦

○未熟児で生れ，25日間入院。

○2～3歳頃，唐突な行動が目立った（ミルク瓶を飛びつくようにしてとる。自動販売機めがけて，左右も見ずに道路を横断，あやうく自動車にひかれそうになった，など）。

○チック症状は3歳頃より始まり，症状は変わりつつも，現在までも続く（鼻を絶えず吸う，肩をあげ首を振る，Yシャツの衿の先端を鼻のあなに入れる，キーという鋭い奇声を発する，など）。

○不登校になってから，ある相談室のカウンセラーとかかわりを持ってきた。母親はそのカウンセラーを信頼している。

(5)主訴

１）小学校２年の夏休みあけ頃から，始まった不登校傾向。はじめ，気分が悪い，お腹が痛い，という理由を上げていたが，朝眠くて起きられない状態でもあった。

２）チック症状としての奇声。絶えず，発するだけで無く，まわりの家まで聞こえるほどの大きさである。

３）母をけとばしたり，物をなげたり，乱暴な行動。

といった３点であった。

(6)インテーク時の印象

○名前を尋ねられて，不明瞭で小さな発音で答える。自分の名前を平仮名で書く。そこで，漢字で書くよう促したが書かなかった。

○「お父さんと，どんな遊びしたの？」との質問に「キャッチボール」と小さな声で答える。「お父さんに叱られたことある？」という質問に「こわかった」と答える。終始おとなしく，積極的に質問に答えることはなかった。しかし，約１時間，じっと座っていた。

(7)総合所見

１）自己像がまだまだ不明確なようで，発達に未熟なところを感じる。

２）他の相談室にも喜んで行っているし，近所の子とは遊んでいるので，不登校の状態像としては，軽度と考えられる。

３）非常に複雑な家庭環境（父親の再婚によって生まれた本児，義理の兄），離婚による父親像の喪失，母親の育児態度の問題（登校してもらうために，子どものいいなりになる傾向がある）など，本児の自我形成に大きな困難を与えたと思われる。

４）自我形成の未熟さが不登校を，家庭環境の複雑さがストレスとなってチック症状を，母親の追随的な対応が暴力を引き出しているのではないか，というのがインテークでの結論であった。もちろん，家族と本児をそこまで，追い込んだ社会的背景も見過ごすことのできない要因となっているが，直接的に本児の症状を現出させていると思われる点を取り上げた。

以上のことを考えると，本児には箱庭制作を通して，自己像の明確化，無意識世界の体験などを図り，自我形成の援助をすることが必要だと思われる。母親には，カウンセリング過程の中で家庭における人間関係の調整（たとえば，本児との交流パターンの変換など）を実現する。そのことを通して，前述の諸問題は，結果として克服されると考える。

２．箱庭制作を媒介とした本児とのかかわり

昭和62年５月７日より，Ｋ児については鹿児島大学教育学部障害児教育学科プレールームにおいて柳北（当時障害児教育学科４年生）が週１回60分の箱庭療法を中心としたかかわりをもち，母親については同第二面接相談室において清原が面談を行い，昭和62年12月24日まで，全18回のセッションを行った。なお，次章に述べる結果は，18セッション中，箱庭制作を行った部分のみを取り

出し，分析したものである。

○1セッションの構成（60分）

箱庭制作と自由遊びを組み合わせ，自由で受容的で，本児の本来の自我が発揮されやすいようにかかわった。

○箱庭制作の用具

砂箱（内寸法57×72×7㎝，内側を青く塗る），砂（水でしめらせる），ミニチュアのおもちゃ（人間，動物，怪獣，乗物，植物，建造物とくに橋，柵，金属片，貝殻，石その他なんでも）

○実施法

「このおもちゃを使って，この砂箱の中に，何かを好きなように作ってください」と教示後，子どもに自由に箱庭の制作をさせる。何か質問がある時は受容的に聞くが治療者側の意図というものが子どもに影響しないように「自分の思うとおりにしていいんですよ」とだけ答える。制作時間は，子どもが完成したと思うまで行う。子どもが安心して自己表現ができるような治療者との関係が大切であり，受容的な空間を構成する。完成後，2人で鑑賞し，簡単なインタビューを行う。あくまでも，子ども自身に作った全体像を再認識してもらうためのインタビューであり，治療者側の解釈や分析的なことは一切述べない。子どもが作った作品のイメージを言語化できない場合でも「他にほしいおもちゃはありませんか」や「ここに自分がいるとしたらどこですか」などという質問で，間接的に理解の手懸かりを得るようにする。

○自由あそび

本児の年齢が低いため，遊びの要素も取り入れた。遊戯療法の考え方を参考にして，子どもがあるがままの姿で，活動できるように配慮する。遊びは，できるだけ誘導せずに，子どもの自発的な動きを尊重する。遊具はプレールームに備えてあるものを使用した。

○作品の理解（解釈）

作品の理解にあたっては，手書きの作品スケッチ（次章「結果」で図として紹介），治療終了後撮影した写真，治療中の様子の筆記記録，ＶＴＲ記録画をもとに，河合隼雄，秋山達子，岡田康伸らが試みている理解の観点を総合的に参考とした。なお，現時点では，観点の体系化，さらには評価としてスケール化は困難であったので，筆者たちなりの理解にたよった。主観的とも言えるが，筆者たちの意味づけも大切と考えている。1セッション終了ごとに，ケース・カンファレンスを行い，理解としての評価をまとめ，さらに全体的な様子についても考察を加えた。

○スタッフ

子どもとのかかわりを持つ治療者（柳北）

親との面談，スーパーバイザー（清原）

筆記記録・箱庭模写者（丸内）

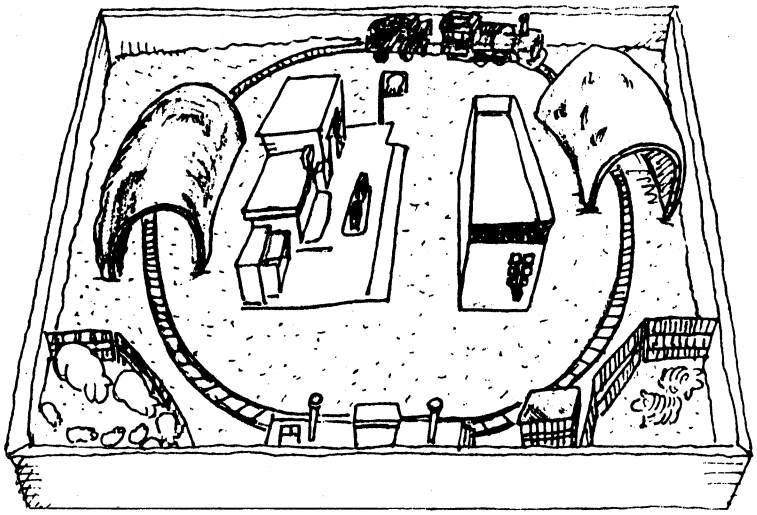
ＶＴＲオペレーター（２人）

治療者，記録者が，子どもと共にプレールームに入室，ＶＴＲオペレーターはワンサイドミラーでしきられた観察室より，ＶＴＲカメラを遠隔操作し，テープに子どもの様子をおさめる。筆記記録者は治療者と子どもの様子を筆記し，終了後，箱庭作品を模写する。スーパーバイザーは母親と面談し家庭での本児の様子を聞き取り，母親の育児上の相談にのり，ケースカンファレンスを主催する。

Ⅲ．結　　果

第１回箱庭制作

（箱庭制作におけるＫ児の様子）狭い面談室にＶＴＲカメラや記録者などもおり，緊張が強く警戒していた。そのためか，言葉使いも丁寧で大変，礼儀正しく振る舞った。初めて箱庭に接して遊び方を良く理解できずに箱の外にレールを敷いて遊ぼうとした。そこで，治療者がもう一度，教示しなおす場面もあった。Ｋ児は黙々と作業を続けた。話かけるとうつむくか「はい」と返事をするだけであった。作る作業は丁寧で注意力も持続していた。咳や奇声などのチックが時々みられた。インタビューにたいして，うつむきかげんで無口であり，治療者の方から「面白ろかった？」と聞くと「面白いでした」と小さく答えただけであった（所要時間25分）。



箱庭(1)　学校から汽車に乗って

（統合性）建物，鉄道，家畜，柵が平板に置かれ，Ｋ児の内的エネルギーがあまり放出されていない。ほぼそれらの玩具が対称に置かれ，丸いレールも加わり，マンダラを構成している。内的エネルギーが低いためマンダラを構成しつつも統合性は低いといえる。

（空間配置）根源的・衝動的世界を表現するとされている左下隅にブタの群れ，家庭を表現するといわれている右下隅が羊の柵になっている。どちらもＫ児自身の根源ともいえる場所におとなしい家畜が配置されている。彼自身に内在する攻撃性は出現するどころかおとなしい家畜として柵の中にとじこめられた状態にある。

（主題）学校が登場していることや制作後の説明でも「自分は学校から見ている」との発言をしており，学校に対して深い否定的なイメージはないのではないかと思われる。後半から出てきた家畜たちはかならずしも家族を形成していない。家，家族のイメージが薄のか。また，狭い柵にたく

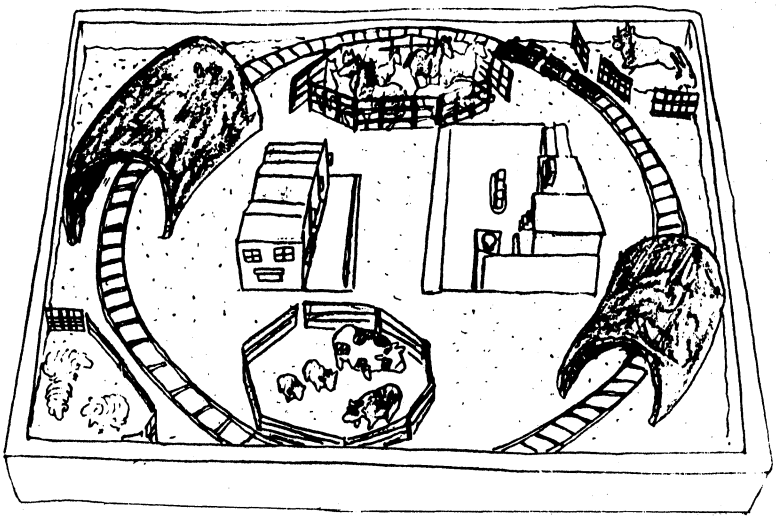
さんのブタを入れたり，広い柵に二頭の羊しか入れなかったりバランスの悪さを感じた。

（全体的印象）初めてということもあり，内容に乏しく固い印象の作品となった。第1回から学校が出てきたことに驚いた。

（母親の話）母親をけとばすなど乱暴な行動がある。小学2年の夏休み明けから学校に行かなくなった。担任の先生の援助で3学期は行った。3年のクラスがえから，また行かなくなった。現在は行ったり，行かなかったりしている。始めは気分が悪い，お腹が痛いといい，現在は朝起きられない状態である。

第2回箱庭制作

（K児の様子）受身的ではあるが，熱心に制作している。ほとんど話さずに黙々と作っている。考えている時間が長く，そのため雰囲気も静けさが増すように感じられた。緊張しているのか，最初正座して砂箱に向かったが，作り終える頃には姿勢も崩れ，楽しそうに列車を動かしていた。箱庭には積極的に取り組むが，治療者の働きかけに対してはやや消極的である（所要時間25分）。



箱庭(2)　柵に囲まれた町を過ぎて

（統合性）構造的にはマンダラ構造で，分割もなく統合されているように見えるが主題の不確かさ，不自然さも同時に存在し，K児自身，箱庭全体に対するイメージができていないように思われ，よって統合性もそれほど高くないと思われる。マンダラ表現について言えば箱庭(1)よりもさらにマンダラ的配置になってきた。黒い丸のレールに置かれた対称点にある2つのトンネル，向かいあった建物，上下，左下・右上に置かれた動物の柵などが，それである。K児の精神的平衡を保つためのギリギリのマンダラなのか，それとも良い兆しとして安定したマンダラなのか，今後の作品と関連づけて見なければならない。

（空間配置）根源的，衝動的世界を現わすとされる左隅下に羊の柵がある。全体的にも言えることだが，砂にK児が触れないこととも合わせて，K児の攻撃性やエネルギーがほとんど感じられない。また，動物を登場させるために柵が必要なこと，ガソリンスタンドについている人物以外に，そとを自由に行動できる主体的な存在がないことなどから彼の抑圧された内面が推察される。しかし，スクーターに人を乗せようとした（うまくいかず，削除）ことなどから，あくまでもかたくなに自由な存在を置けないわけではないので，気が向けばいつでもそうなれるのではないかという将来的展望が持てる。

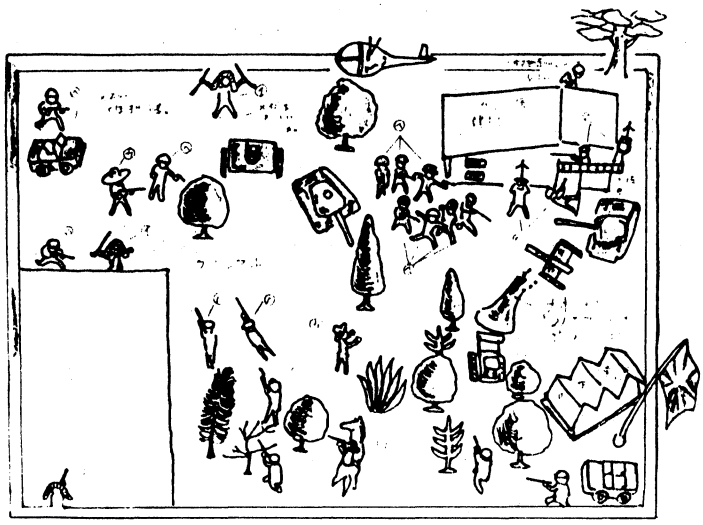
（主題）内容が少々豊かになったが，箱庭(1)とほぼ同様の作品。しかし，動物群にライオンの群れが登場，細長いスペースにちりじりになっているライオンたちに動きが感じられる。馬の群れは大小様々な馬からなり，動きもあるが今回も特に家族を形成していない。

（全体的印象）おとなしく内向的な作品であるが，ライオンという活動的な存在の現れは，それを打ち破る新しい予感を感じさせる。

（母親の話）先週から比較的，学校に行くようになった。とくに，メロンが好きで，朝食のときメロンを出すと行く。しかし，行くとはいえ，11時頃登校し，情緒障害児学級に行く。また，その学級に行っても，すぐ本来の学級に行くことを勧められること，友達から「バカな子がいくんだよ」と言われることなど気にしている。学校でいやなことがあると（推察），弟にあたったりして，いじめる。学校に行かない時はＮＨＫ教育テレビをみて，ごく簡単な理科の実験をすることもある。

第３回箱庭制作

（Ｋ児の様子）じっくり好きな玩具を選び，砂箱の回りを活発に動いたことが印象的であった。使用した玩具の数や種類が増したことなどからもＫ児が熱心に制作していたことがうかがわれる。制作中の会話はほとんど見られなかったが，うまくいった時には微笑が見られたりした。また，トイレに途中で行くなどの行為もあった。チック症状と思われるしゃくり上げ，咳ばらいなど時々見られた。始めの３分は戦争に関する玩具（兵士，戦車，大砲）を手に取って見ていた。３～20分の間に，インディアン，建物，車，戦車，カウボーイ，兵士などを次々に置いていく。15分までは全体的に人も少なかった。20～28分頃には，植物がたくさん登場。芝生（グリーン・マット）や巨木など幅広く使用した。



箱庭(3)　ヘリコプターから見た戦いの国

（統合性）モチーフに方向性がなく，中心になるものもなく，一見，統合されているようには見えない。しかし，隙間なく置かれた玩具は分割もなく自由で流動的である。その点で，エネルギーの高さがうかがえるし，１回目より，テーマが一貫していることともあわせて，統合性の高い作品とも言える。

（空間配置）根源的・衝動的世界を現わすといわれている左下隅にインディアンが銃を構えて立っている。そこだけグリーンの芝生で区分され，誰も入ってこない。Ｋ児の防衛本能が，一人で戦っているようである。

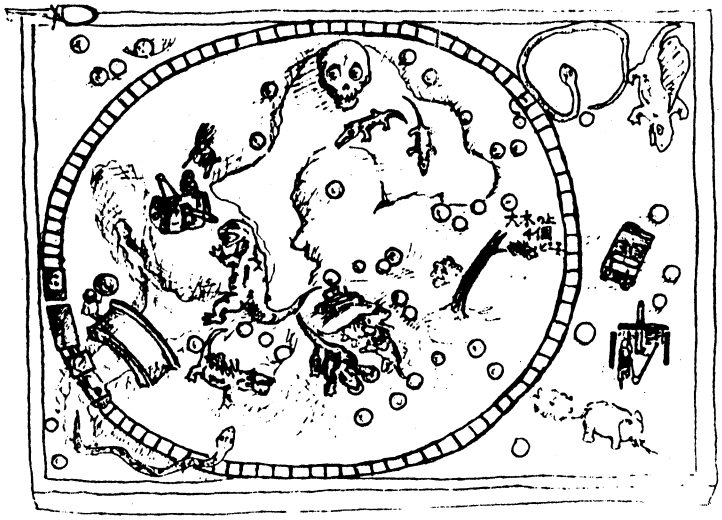
（主題）テーマは「戦争」である。戦いにしては静かで美しい印象を与えるものの，そこに登場する者たちは，だれ一人として安全でなく，不安に見舞われている。特筆すべきことは，敵対する者同士がほとんど正面からぶつかっていないことである。まるで，自分の内面を明確な状態で表現できないでいるK児のようである。なお，グリーンの芝生にいるインディアンや丘の上のインディアンなど，3人のインディアンは故意に誇張されているが，K児の思い入れも感じられる。この3人が逃げも隠れもせず堂々と敵に向かっているのである。これを支援するかのように空にヘリコプターが飛んでいる。

（全体的印象）今回初めて，K児は積極的に砂にかかわった。K児の箱庭に対するエネルギーが感じられた。

（母親の話）登校状況は1週間のうち1回欠席，同じアパートの友達が迎えに来てくれると登校しやすい。また，朝には目ざまし時計を耳もとで鳴らすなど起床の刺激を行っている，と言う。しかし，勉強については苦手意識をもっており，宿題などほとんどしない。平仮名もまだ十分に獲得していない。家庭では夕方以降の暗さを怖がりフロに一人で入るのもいやがる。母親がフロに入っているとき，一人になることを怖がってドアを開けて入口で待っている。TVを家族で見ていると，K児は母親にもたれかかってきたり，弟と母親の間にわりこんできて，弟とケンカになることがしょっちゅうである。

第4箱庭制作

（K児の様子）開始後すぐにいつもの線路を円型に組み立て始める。大きな木の位置，木枠上のヘリコプター，兵士など，箱庭(3)と類似した活動がみられた。12分を過ぎた頃から，何気なく玩具で砂に跡形をつけ始め，ついに自ら砂を掘り出す。始めは少しずつ，次第に玩具のほとんどを外に出して大々的に掘り始める。ついに川と湖が登場した。再び玩具を中に入れ，置くだけのものを置いてしまうとK児はビー玉を箱の砂の中に投げつけ，ビー玉が砂に埋まってしまうという遊びに熱中した。ビー玉を使いきると「終わりました」と自分からはっきりと治療者に告げた。制作後の質問に自ら付け加えて説明するなど積極性もみられた。また，始めしゃくりあげ，鼻すすりなどのチックが見られたが砂を掘る，ビー玉を投げかけるなどの活動中，チックはほとんど見られなかった。



箱庭(4)　太古の川を渡って

（統合性）箱庭(3)に引続き，戦いのテーマと思われるが，傘を持

ち楽しそうに橋を渡ろうとしている人物がいる一方，鉄道に機関車や象がいるといった風景で，一見，バラバラな印象を与える。しかし，川には橋がかかり，レールを横切るヘビなど流動性があり，丸いレールと対称におかれたヘビなどゆるやかなマンダラを構成し，水の出現など統合性の可能性は高いと思われる。

（空間配置）左下隅に川からあがってきたヘビが出現した。これからやってくる列車を襲うがごとくに，ヘビはエネルギーの流出を表現していると言われている。Ｋ児の攻撃性の放出を見る思いがした。社会的側面を表す右上隅にもヘビがいる。家庭的な側面を表す右下隅には象がいて，理性的精神界を表す左上隅にはヘリコプターが飛ばんとしており，Ｋ児の活動的エネルギーが治療者にも感じられた。

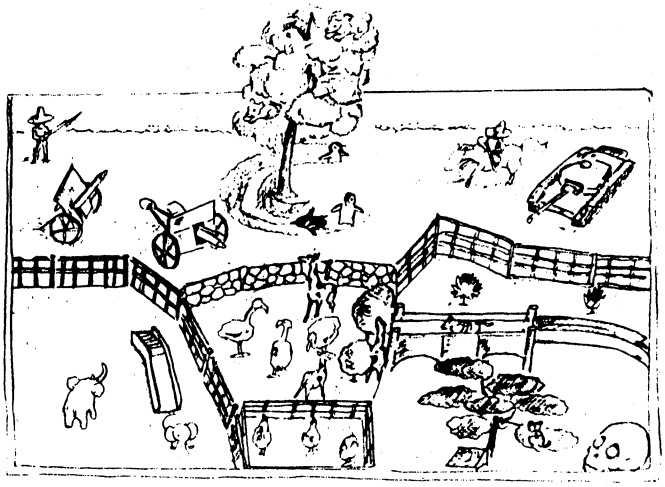
（主題）大砲と人間は恐竜たちと戦い，ヘビは鉄道を襲い，山の頂上ではライオン同士が争っている。箱の中ではあちこちで部分的な争いが展開されている。湖の中にはワニが潜み大きなドクロが中心におかれており，無気味にもみえるが，水と大きな木，美しいビー玉など全体的で明るい雰囲気を受ける作品であった。

（全体的印象）ビー玉を大砲の玉にみたててなげて遊んだり，化石の目にビー玉を入れたりリラックスして箱庭でたのしんでいた。水の出現，１対１の戦い，生と死などＫ児の生へのエネルギーを思わせる主題がいくつも表現されていた。

（母親の話）学校に行っている。友達とお菓子の付録についてくるシール集めの競争をしており，神棚を作ってシールを保管している。友達より，良いシールをたくさん持っている。

第５回箱庭制作

（Ｋ児の様子）まず，大木をつかみ，中心に据える。最初から最後までゆっくりした同じくらいのペースで作っていく。会話はほとんど無いが，大変落着きが見られ，制作する態度にもゆとりがあった。チックはほとんど出ていない。大砲で子ライオンを標的に玉を打って遊んだり，ゾウの柵の中に滑り台を置いて滑ったり，キリンに木の葉を食べるしぐさをさせたりと，いろいろな動きを作って楽しんだ。



箱庭(5)　偽りの平和があった

（統合性）一見，動物園的で楽しげな風景であるが，ほぼ真ん中で区切ってあり，手前は柵の中の動物たちであり，向こう側はその柵の中の動物達を殺そうとしている人間や武器というように分けられている。柵の中の動物たちは滑

り台や木に移れる橋などにたわむれ，大変楽しそうであるのに，何も悪いことをしていない動物を人間が殺すというストーリーである。動物たちはほぼ種類別に柵で分割されていて，統合性は高いとは言えない。しかし，以前の全体的に漠然とした世界から脱して，もう一度細分化しようとしているように感じる。それを裏づけるように，一つの柵の中がそれまでの柵と異なり，一つ一つに個性がもたされていて内容が豊かである。

（空間配置）箱を上下に分け，下の方は柵と動物の世界，上の方は人間と武器の世界となっており，上の方は空白の部分が多い。左下隅に象の柵，右下隅に虎の柵があり，右下隅の角にドクロが置かれている。家庭的，情念的な部分を表すとされる右下隅に虎とドクロがあることは興味深い。また，上下を精神と肉体，未来と過去，父と母などと対応させて考えた場合，上にある人間が下の動物を殺そうとしているともとらえられる。K児が今の状態の自分とあるべき自分との間で強く葛藤しているとも思われる。

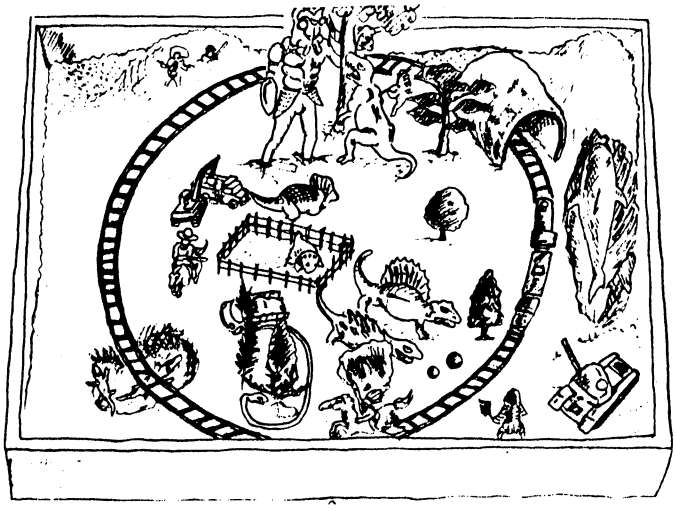
（主題）柵の中の楽しげな動物と，それを殺そうとしている人間の二つの世界が展開している。戦いの内容とも言えるが，箱の半分はたくさんの柵で動物を囲い込んでおり，特殊な作品である。戦いはあくまでも一方的であり，K児の攻撃性がはっきりと表現されている。統合への一過程として重要な作品であると思われる。

（全体的印象）ゆとりが感じられ，K児の内面も自然に表現されたようである。

（母親の話）夏休みなので，外に出る習慣をつけるため，いろいろな所にK児を連れ出している。

第6回箱庭制作

（K児の様子）今回も無口で制作したが，チックも少なく，大変静かだった。しかし，箱庭(5)の時よりも自由な雰囲気に欠けていた。それでも，恐竜の頭を砂に埋めた時，治療者の方を見て笑った。新しい試みをする時，K児はよくこのような行為をする。今回はバルタン星人，サメ，ブタを乗せたトラクターなどを登場させ，さらに玩具のレパートリーを広げた。治療者の不手際で砂に水を加えなかったため，木などが幾度も倒れて苦労していた。また，一度置いた玩具を幾度も移す動作もみられた。治療者のインタビューにもなれてきたのか以前よりもハッキリ答えるようになってきている。



箱庭(6)　支配と反目の世界

（統合性）柵の動物は消え，再び人間対恐竜の戦いになっている。線路の内と外をトンネルや池が結んでおり，かっちりとした分

割はない。しかし，ほぼ中央の恐竜の赤ちゃんは回りの線路によって二重の輪に囲まれている。これは，まだまだ強固に自分を守っているＫ児の心のように感じられた。全体的に特別の分割もなく，人（戦車を含む）対恐竜（ヘビ，ワニ，サメを含む）の戦いが箱全体に展開されてはいるが，方向性もバラバラで統合性はそれほど高くはない。

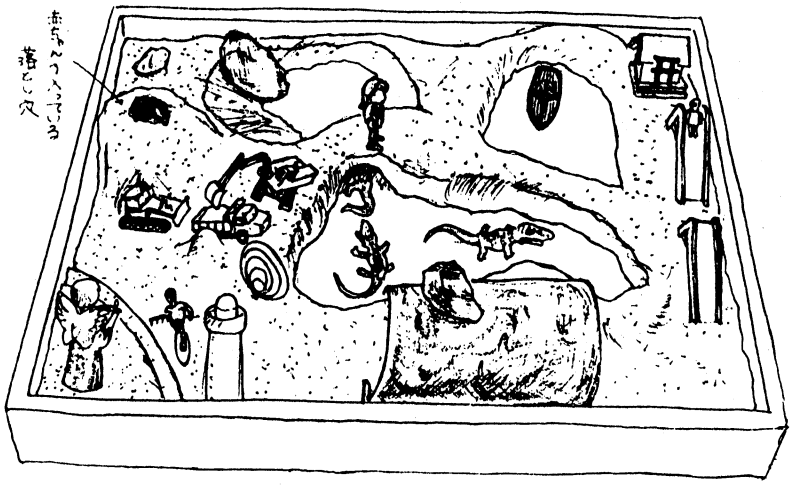
（空間配置）左上隅の精神的・宗教的なものを表すとされている場所に小山があり，土の中に鉄砲を持った兵士が置かれ，一方に立っているインディアンが置かれている。根源的・衝動的なものを表すとされている左下隅には，線路の下に潜むワニがいる。右下隅は家庭的，感情的な場であるとされているが，戦車と戦うインディアンが立っている。Ｋ児の戦いへのエネルギーが感じられる。攻撃性と葛藤の感情をＫ児が表現していると思われる。

（主題）恐竜対人の戦いのテーマであるが，一方では“砂に埋める，食べる”などの表現もみられた。これらは，死を生む戦いの中にあって生へのエネルギーを生む行為であり，Ｋ児の中に生へのエネルギーが満ちてきたことを表している。大木にひそむ兵士，砂の中から現れる兵士，銃を持ち構える兵士などと人を襲う恐竜たち，そんな中で殺されないようにとブタを運ぶトラック，赤ちゃんの恐竜を隔離する柵など，守ろうとする表現も見られた。さらに，水の中のサメには金魚，恐竜にはビー玉，ヘビには小馬とエサらしいものが与えられている。

（母親の話）同じアパートに住む障害者夫婦（妻が障害者）が同情して，ぶどう狩りなどに連れ出してくれる。また，Ｋ児は泊りがけで友達の家に遊びに行く。

第７回箱庭制作

（Ｋ児の様子）無言で黙々と作っているが緊張は見られず，あぐらをかいて制作していた。登場する玩具も少なく，作る時間も短いのだが，砂に触れる時間は長く，作品にも力強さを感じる。貝を立てたり，キューピー人形を山の穴に落としたり，滑り台を二本つなげたりと新しい試みが今回もたくさん見られ，Ｋ児が楽しんでいるように思われた。チックもほとんどみられなかった。完成後のインタビューで，箱の手前側に架空の山があることなど説明していた。



箱庭(7)　荒れた聖地にたたずむ

（統合性）いろいろな要素が含まれていてテーマの統合性という意味ではとりとめもない作品に見えるが，対称に置かれた宗教的モチーフをはじめ，Ｋ児の心像風景として不思議な世界が作られており，力強さと豊かさを感じる。分割らしいものはほとんど無いが，

一番小さな池だけが他の2つの池とつながっていない。そこに浮かぶ船はどこにも行くことができなく，そこだけに閉じ込められている。

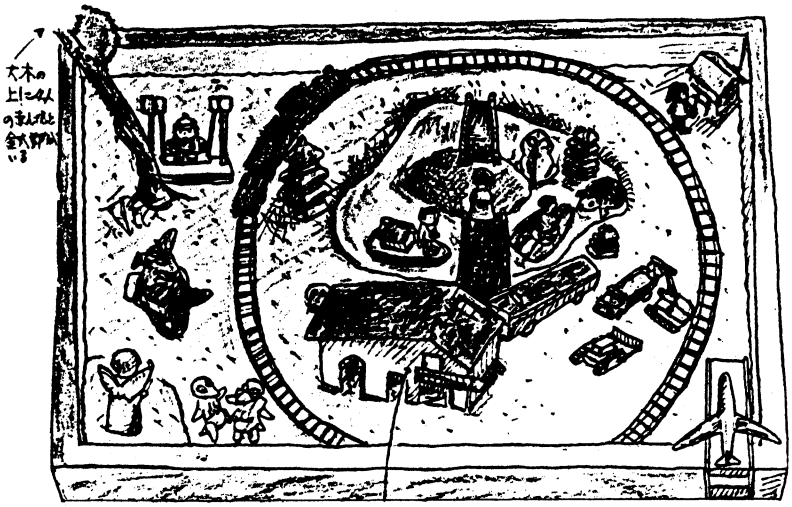
（空間配置）精神的，宗教的世界を表すとされている左上隅に大小の石がある。そのゴツゴツした重い石は彼の精神にゴツゴツとした重くて固いこだわりがあるように思える。その回りに山に埋められたキューピー（赤ちゃん）と池がある。生への再生のモチーフがあることは救いである。また，左下隅に天使とそこを掃除している人が置かれている。K児が宗教的ともいえるものに救いを求めているとも考えられる。右上隅には神社，滑り台とそこで遊ぶ人が配置されている。滑り台で楽しく遊ぶ姿はK児の姿のようでもあり，神社で象徴されるような守ってくれるものが何かあればK児はのびのびとあらゆる場面でやっていけることを思わせた。

（主題）長く続いた戦いのテーマが突然消え，そのかわり木1本生えていない荒涼たる原野の景色である。岩がごつごつしてトンネルの上の岩が痛々しい。しかし，そこには天使が立ち，人々は早くも復興への活動を始めている。橋に立つ人は，遠く未来を見つめるがごとく右を向いている。たいへん宗教的な雰囲気のする作品であった。

（母親の話）H病院でチックのコントロールによいといわれた薬を毎日飲んでいる。そのせいか近頃，チックが少なくなった。

第8回箱庭制作

（K児の様子）長く思案することなく，すぐに砂に触った。黙々と作ってはいるが，リラックスしていて機敏である。チックもほとんど出ない。玩具もたくさん，しかも新しいものを使用した。作りながら，ふざけて治療者を笑わせた。



箱庭(8)　聖　地　復　興

（統合性）目立つ分割はなく，線路や丸い池，対称におかれた天使と神社や中之島，同じく対称に置かれた灯ろうを形成している。K児の安定した自我と高い統合性を感じさせる。また，箱庭(7)で1つだけ孤立していた池が3つとも統合されたような形で，船も流動的に右（未来）へ向かって走っている。

（空間配置）左上隅にブランコとそれに乗る人が置かれている。K児の中に楽しめる余裕が出て来たようだ。左下隅に天使，右上隅に神社が置かれている。これは一ケ月半前の箱庭(7)と全く同じであるところが興味深い。衝動的な攻撃性を押さえ，自分を守ってくれるものへは依存的なK児の気持ちの表れのようにおもえる。

右下隅に滑り台の滑走路とジェット機が置かれている。滑走路は箱の木枠に置かれ，宙に浮いている。K児が家庭において飛躍しようとする力が貯えられていると考える。

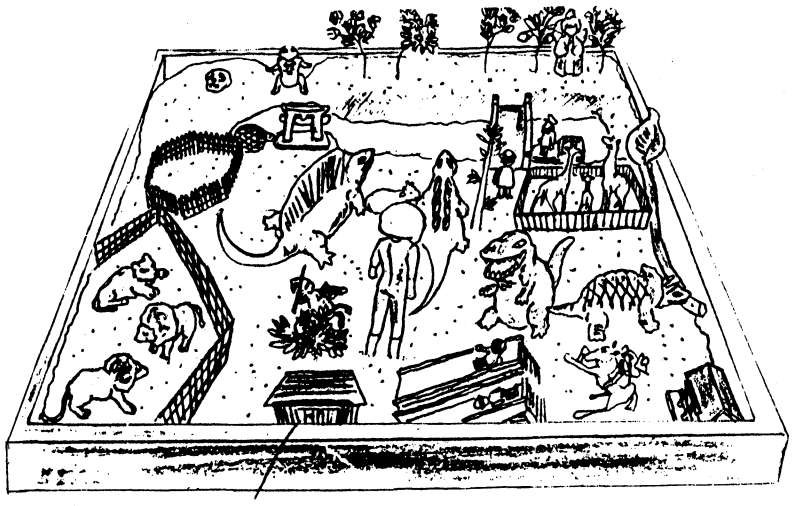
（主題）町や乗物，池に船，それに乗る人，天使や神社に詣でる人など，豊かで平和な風景である。箱庭(7)に続き，ダンプカーなどによる工事はまだ終わっていないが，人々は充分楽しんでいる。また，ガイコツを首だけ出して砂蒸しにした。砂に埋める行為は抑圧を示し，さらにはそこから解放される可能性を示している。ガリガリにやせたガイコツを砂に埋め，再び元気をとりもどすという解釈をK児の姿に重ねたい。

（母親の話）10月10日の運動会に行きたがらなかった。しかし，無理に行かせると，思いのほか楽しめたらしく，この事がキッカケとなり学校に行くようになった。さらに，担任の先生が日記のコメントを丁寧につけてくれたり，K児だけの特別な宿題を用意してくれたり，いろいろな努力をしてくれるようになった。家でのことについては，たまに夜尿があり，フトンがくさくて大変である。チックの薬を「これを飲めば出ないぞ」とK児は頼りにしているが，「癖にならないか」と心配である。カウンセラーが「子どもの自発性を大事にして，かまいすぎないように」と言ったことに対して，「まだ年少なので，すぐに止めるという訳にはいかないが，K児が４年生になったら手をかけすぎないようにしたい」と，述べた。

第９回箱庭制作

（K児の様子）「作ってネ」との言葉に「あっ」と声をあげてから作り始める。制作中はほとんど無口であった。一度ウルトラセブンの人形にドクロをかぶせた時，治療者の方を見て笑った。落ち着いて制作していたが，制作時間が短いこと，一つの柵の中には何も入れなかったことなど，やや意欲に欠けていたようにも思える。しかし，花のついている木や銀色の木など，新しい玩具を登場させ工夫している点も多い。チック症状はほとんど見られない。

（統合性）完全にではないが，川により世界が二分割されている。さらに柵で小さく分けられており，一つの柵は空である。二分されていることにより，統合性が低下したように見える。しかし，作品から受ける印象では，登場する者たちが川の向こうに思いをはせているような，川を渡って行こうとする意志の力を感じる。



箱庭(9)　支配なき安息の地への渇望

（空間配置）精神的，宗教的世界を表すとされている左上に，砂に埋められたガイコツがある。前回からの続きといえるが左上隅に

移動し，安住の地を見つけたが，まだ養生したままである。根源的，衝動的世界を表すとされている左下はライオンの群れである。立派な雄のライオンはいかにも強そうだ。ライオンは王様の象徴でもあるが，男性原理を表したり，隠された情熱を示すこともあり，危険な力を意味する事がある。右隅の上下対称点に天使と神社が置かれた。箱の右半分は意識外の世界を表し，右上は未来を，右下は過去を示しているとも言われている。

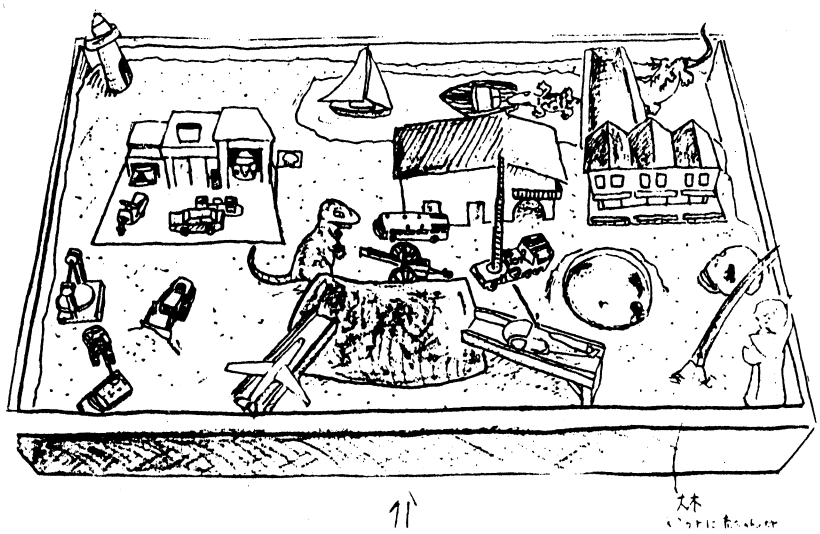
（主題）二つの世界の統合として箱庭を見ると，今回の作品は統合の過程にあるように思える。橋の手前はK児の現実の世界で，動物は柵に入り，恐竜たちはウルトラセブンの手下となって町の治安を守っている。K児らしい少年が滑り台で遊んでいる。一方，橋の向こうは別天地。花が咲き乱れ天使や宇宙人が待っている。そこに橋がかかり，今や渡ろうとしている人がいる。また，エネルギーの流出を表現するヘビがかま首をもたげて川を渡ろうとしている。柵や守りを多く使いながらも，未来を見つめるK児の現在の状態がうかがわれる。

（母親の話）学習発表会でちょっとした役を与えられ，喜んで取り組んだ。面接室にあった人形に服を作って持って来てくれた。K児も母親と一緒に人形の服を作ったことを話してくれた。布の切れ端があるとK児はそれを縫ったりして遊んだりもする。

第10回箱庭制作

（K児の様子）変装用の鼻，鼻髭つきのメガネをつけて来室。治療者や記録者を笑わせてから箱に向かう。玩具を置く時，数回，自らの位置を変えて，考えながら置く場面が何度かあった。チックが再び見られた。おもに玩具柵の玩具を探している時に見られた。しかし，緊張しているといったことは無く，むしろリラックスしていた。そして，作りながら，作ったものの説明をしてくれた。初めてのことであった。

（統合性）これといった分割はなくバラバラな感じを受けるが，恐竜の戦いの部分に多くの玩具が向けられ，そこだけ緊張感が漂う。川は海に向かって流れ，右の方へ向かっている。そこに橋がかかっている。未来に向かう水の力，戦いの緊張感など統合への力を感じる。



箱庭(10)　新たなる船出

（空間配置）左上隅に明るい灯台が置かれ，船出するK児の自立の心を導き支えるかのようである。左下隅に工事をするダンプカー，シャベルカー，ブルドーザーなどが置かれている。改革し，新しく作って行こうとするエネルギーを感じる。右上隅は川で

橋がかかり，川は海へと流れている。渡河は終結に向かうときに現れるもので，Ｋ児の社会へと向かう姿のようである。右下隅には大木とそれに登るキューピー２人と天使，ドクロが静かに置かれ，生と死，誕生のイメージが描かれている。

（主題）海へと向かうヨットを待ち受けるのは恐ろしいワニである。しかし，海へヨットは進んで行く。工事は進み，飛行機は飛ばんとし，車はガソリンスタンドで給油中である。まさにこれから進んで行こうとする力に満ちている。しかし，一方で大砲の玉を浴びて苦しんでいる恐竜，蟻地獄に落ちて行きそうな兵士など死の影も潜んでいる。それを静かに見守る天使。新天地もＫ児にとって苦しいものである。しかし，さらにヨットに乗り，怖い海へと旅立とうとするＫ児の決意を示していると思われる。

（母親の話）近頃はフロも一人で入るようになり，怖がらなくなった。フロから一人で上がって，部屋に一人でいる状態も平気である。チックをコントロールする薬もあまり飲まなくなり，飲んでも一回分の１／４の量を飲む。弟とのケンカは多いが，乱暴な振る舞いは少なくなっている。登校には，かなりの援助をしており，行きたがらない日も，なだめて10時ごろ学校に送り出している。そんな時，下校してきてから母親に「ごめんネ」と言ったそうである。

Ⅳ．考　　察

筆者たちは，Ｋ児に対して，全部で18回の箱庭療法的かかわり，絵画療法的かかわりを持ってきた（本論文は，そのうち箱庭療法的かかわりの部分のみまとめたものである）。その間制作した箱庭作品を基に，考察を進める。

昭和62年12月現在，Ｋ児は母親に支えながらではあるが，登校を続けている。その背景には担任教師の支援を得られ始めたことや教育相談室カウンセラーの援助の力など，様々な要因が機能し始めたことによるものであろう。さらには，治療教育学研究室での筆者たちの，ささやかな試みも若干の意味を持ったのかも知れない。そこで，箱庭作品を通して，本児がどう変容していったかを考察したい。

箱庭作品は，前章で詳細に紹介したように全部で10作である。全体を通して見ると，そこには明らかな変化が存在する。カルフの提案している箱庭制作における自己への過程の段階を考慮し，箱庭作品の表現の変化を指標として，全体を３クールに分けて考察した。作品につけた題名は，箱庭に表現された意味を深く理解するための手段として，ケース・カンファレンスの時に協議して決定した（表１にまとめたものを掲げてある）。以下，クール別に変化の特徴と思われる点を述べる。

１クールは箱庭(1)，(2)である。この頃のＫ児は不安が強く，また治療者とのラポートがうまくとれていず，かなり緊張が強かった。作品は自己を必死で守ろうとする，固い感じのするマンダラ構造であった。Ｋ児に潜在的に存在するはずのエネルギーは表出されず，表面的な町の風景が作られただけであった。Ｋ児が砂に触ること自体を嫌がっていたことも合わせて考えると，治療的な空間

K児の箱庭作品

クール	番号	月　日	題　名 (Time)	箱庭の内容	段階
1クール	①	5月7日	「学校から汽車に乗って」（25分）	固いマンダラ構造の作品 初めての箱庭のせいか，緊張が強い。一回目から学校が登場。	動・植物の段階
	②	5月28日	「柵に囲まれた町を過ぎて」（25分）	一回目とほぼ同じような作品。静かな雰囲気も同様。K児のエネルギーは柵にとじこめられたままである。	
2クール	③	6月18日	「ヘリコプターから見た戦いの国」（28分）	人と人が入れ混じり戦っている。戦いには，方向性もなく敵も味方もはっきりしていず，混乱している様子。	戦いの段階
	④	7月2日	「太古の川を渡って」（35分）	K児は土を掘り水を出した。生と死のイメージが強い作品。湖からヘビが上がり，ビー玉を投げる様子にエネルギーが満ちている。	
	⑤	8月12日	「偽りの平和があった」（28分）	箱を上下，2つの世界に分け，動物の世界と残忍な人間世界に分けた。K児の混乱はなくなり，はっきりした分割になった。	
	⑥	8月27日	「支配と反目の世界」（27分）	餌を与える，弱いものを守るという場面が戦いの中に表現された。戦いは人対恐竜，は虫類にしぼられている。	
3クール	⑦	9月17日	「荒れた聖地にたたずむ」（15分）	戦いは終り，荒野が広がる。植物はなく，かわりに石が置いてある。中央の橋の上で遠くを見ている少年が印象的	統合への段階
	⑧	11月5日	「聖地復興」（17分）	マンダラ構図が現れる。①とは異なり，内容が豊かで流動的。K児の安定した心理状態を反映しているようである。	
	⑨	11月19日	「支配なき安息の地への渇望」（17分）	渡河のテーマが現れる。川の向こう側は花が咲き乱れ，天使が待っている。こちら側は，力によって管理されている社会。	
	⑩	12月24日	「新たなる船出」	登場する物すべてにエネルギーがあふれている。海は，こわいワニがいるが，ヨットは出航しようとしている。	

（表1）

が確立していないレベルにあったと思われる。

２クールは，カルフのいう「動・植物の段階」と「戦いの段階」がほぼ重なって表現されたと考えられる。静的で，固定的な町の風景が突然，無意識内に閉じ込められていたエネルギーに満ちた未分化な，本能的・衝動的な生命の動きによって戦いの場面に変わる。箱庭(3)では，未分化で混乱したＫ児の自我を象徴するかのように，敵も味方もわからぬほど混然一体とした戦いである。しかも攻撃する人は正面からではなく，必ずといってよいほど物影から狙っている。何に向けて攻撃しているのかわからぬ兵士もいる。まるで心の底から突き上げてくる不安を，何にぶつけていいのかわからず，また何が恐ろしいのかわからない漠然とした不安に戦き，乱暴な振る舞いをしているＫ児を見る思いがした。箱庭(4)になるとＫ児は積極的に砂を掘り始めた。治療者との関係も少しずつつくられてきた頃でもあった。湖が出現したことにより，彼の無意識の世界が，水がにじみ出るように箱庭に表現されてくるようになった。心の奥深く，衝動的場所といわれる左下隅は，湖の先端であり，そこから蛇が這い出しており，Ｋ児のエネルギーが外に向かって流れ出した印象を受けた。戦いも恐竜対人，列車対蛇，丘の頂上を競うライオン同士の戦いと，その対象がはっきりとしてきた。制作終了間際，Ｋ児は急に美しいビー玉を手に取り，砂箱に向かって投げつけた。ビー玉はズボッと砂に埋まる。Ｋ児は夢中になって幾つも幾つも，容器の中のビー玉がなくなるまで投げ続けた。途中，恐竜の口，ドクロの目にビー玉を入れたり，大木に載せたりもした。制作後のインタビューで「大砲の玉が落ちてきたんだ」と満足そうに語った。一方，社会的関心を表すとされている右上隅には，蛇，恐竜がどっかりと存在している。社会（仮に学校としてもよいが）に対する恐怖をＫ児が感じていることが推察される。これが箱庭(5)になると，箱庭の世界が二つに分割されている。渾沌としていた未分化な自我が，ついに自我と自己という二者に分化し，さらにこの二者が均衡を保てないまでに成長してきたことを意味しているように思える。つまり，カルフのいう動・植物段階のフィナーレでもある。そして，本当の戦いの段階に突入していく。作品の下半分は，柵で細かく分けられた動物の国。動物たちは楽しそうに遊んだり，食べたりしている。しかし，上半分は，そんな動物たちを殺そうと武装している人間たちである。こうした表現は自己と自我との関係に亀裂が生じたことを示し，自己の領域に自我が侵入してきたことになり，ここに二者間の新しい均衡が必要になる。新しい均衡を得るためにこそ，次なる「戦い」の段階へ移るわけである。空間配置の観点から見ると，箱の上半分は未来，精神界を示すものとされているが，そこにいる人たちがみな武装し，こちらを狙っているという箱庭表現は恐ろしいもので，筆者自身，一瞬恐怖を感じたほどである。箱庭(6)は最後の「戦い」の作品である。それを象徴するかのように弱者を守る表現，砂の中から出現する表現など，新たなる成長を思わせるテーマが出てきた。一方，戦いは人対恐竜＋は虫類で，箱庭(5)とほぼ同じ状態である。また，この作品は子どもの恐竜の柵とレールとによって，二重の円，つまりマンダラを構成している。

３クールは，全体的に宗教的モチーフが続けて使われた。箱庭(6)から(7)になると，一転して草木一本も無い荒涼たる光景に変化する。あたかも戦いの限りを尽くし，古いものは消え去り，新しい

世界の創造が始まるかのように，天使が降り立ち，人や車は工事を始め，山の穴では赤ん坊が眠っている。象徴的表現は，中央部に立つ少年が未来を意味するとされている右の遙か彼方を見つめている部分である。新しい社会性がその身にやどり，来るべき未来が押し寄せて来るのを待ち構えているようにも見える。宗教性の強い作品で，このような作品を9歳のK児が作り出したことに驚くとともに感動を覚えた。「聖地復興」と名付けた次の箱庭(8)は，箱庭(7)の舞台がそのまま繁栄し，豊かになったのではないかと思うほど，天使，神社，池などの配置が類似している。この二作の間には一ケ月近くの時の隔りが存在しているのだから，不思議である。また，箱庭(8)は豊かなマンダラ構造になっており，K児の安定した自我を表現している。また，戦いの場面は消え，落ち着いた宗教性と全体性によって，統合の段階に入っていると思われる。箱庭(9)は渡河のモチーフである。川の向こう（上部）は，花が咲き乱れる美しい場所で，箱庭(5)と比較すると変化してきたことが一目でわかる。今，そこに人が渡って行こうとしている。橋の向こうには天使が待っている。天使のいる右上隅は，かって恐竜がいて怖い所だったことも考えると，大きな変化といえる。右上隅が宗教的モチーフになったのは，箱庭(7)からであり，ちょうど第三クールに入った時である。渡河というモチーフも統合段階には多い表現である。これらは終結を意味している。箱庭(10)も同じで，統合の段階に多い町の風景で，海は右（未来）に向かって広がり，ヨットが船出しようとしている。灯台はヨットを見守るように立っている。根源的世界を表現する左下隅は，今，新たに工事が始まっている。K児自身の再出発を示すこれらのモチーフの出現で箱庭療法的かかわりは終結した。

終結したといっても，ここで一つの均衡がうまれただけに過ぎず，K児のこれからの人生において，再び多くの危機的状況が生じるであろう。その度に，K児が箱庭表現において筆者たちに見せてくれた新しいものを生みだすエネルギーによって克服していってほしいと願う。K児の母親の話にもあったが，当初，彼は夜を大変怖がっていた。一人で暗い部屋に残ることが恐怖だった。風呂も一人で入ることを怖がった。彼の無意識界にある漠然とした恐怖の魂が，夜の暗闇と重なって現実感となって押し寄せて来る。この巨大な恐怖の力は子どもであればあるほど強いエネルギーを持っている。筆者たちはK児と共に箱庭における戦いの恐怖と緊縛の世界を体験した。K児のかたくなな抑圧されたエネルギーは箱庭という窓口から外へと少しずつ流れ出てきた。戦いの表出の後に，恐怖は石となり（箱庭(7)），そのうち消えてしまった。K児は，今，暗闇を以前ほど怖がらなくなった。箱庭の無意識界を表出させ治癒に向かわせる不思議さに筆者たちは驚くばかりである。

謝　　辞

筆者たちに箱庭という世界を体験させてくれたK児とお母さん，弟さんに心から感謝します。また，こうした機会を与えて下さった鴨池生協クリニックの小児医の皆様，そしてプレールームその他多くの便宜と援助を下さった障害児教育学科の先生方，学生，学友の皆さんにも心からお礼申し上げます。最後に，K児のより一層たくましい成長を祈っています。

注（数多くの文献を参照したが，紙数の関係もあり，直接引用，参考したもののみ掲げる）

1）　稲村博；登校拒否の克服，新曜社，1988
2）　小泉英二；学校ぎらいの子どもの理解，治療教育講座５巻，pp,23－34，福村出版，1980
3）　高木隆郎；登校拒否の理解，登校拒否，pp.11－58，金剛出版，1983
4）　ここのユングの言葉を中心に箱庭の説明の個所は，次の文献に負っている。
　　岡田康伸；箱庭療法の基礎，pp. 8 －11，誠信書房，1982
5）　ここのマンダラの解説部分は４）の文献，Ｐ.10の脚注に負っている。
6）　河合隼雄；ユングの生涯，第三文明社，1978
7）　同上書４）pp.29－31
8）　河合隼雄他；箱庭療法研究１，p.x,誠信書房，1982
9）　河合隼雄編；箱庭療法入門，pp.33－51，誠信書房，1969